

弘前市立郷土文学館 《開館記念 無料開放》(6/30 (土)・7/1 (日))

郷土文学館は、平成 2 年 7 月 1 日の開館以来 28 回目の開館記念日を迎えました。



1 階ロビーにて終日開催された、「歴代企画展のスタンプ展」や館内の展示を見て答える「クイズラリー」等、好評を頂きました

クイズラリー 3 問以上正解者には文学館オリジナル缶バッジを進呈!



2 階ワークショップでは、『少年倶楽部』昭和 7 年 7 月号付録の「ツバメグライダー」を再現しました。



80 年以上も昔の付録ですが、作って、飛ばして遊ぶ楽しさは今の子ども達にも人気です。

2 階「ラウンジライブ」では、6/30 朗読会「津軽の詩」より、7/1「錦風流尺八を聴く」尺八ライブ等が催され多数のご参加を頂きました。



普段静かな文学館では聴けない、すばらしい音が、吹き抜けのホールに響き渡っていました。また、語る会による「津軽方言詩」の朗読も味わい深いものでした。



文学館に響きわたる「音色」

アンデルセンの名作『絵のない絵本』の第十二夜は、紀元 79 年ベスビオ火山の大噴火で埋没したイタリアの古代都市ポンペイの遺跡が舞台です。

— 死んだように静まり返ったポンペイの円形劇場。冴えわたる月光のもと、劇場を訪れた外国人の一団を前に、ひとりの歌姫がこの場所から靈感を与えられたかのように歌いはじめる。それは、疾走するアラビアの野生馬のように軽快で淀みなく、ゴルゴダの丘の十字架の下にたたずむ聖母マリアのような深い苦痛が込められた見事な歌であった。数千年前と同じような拍手と歓呼の音が響き渡り、一瞬「死の都」は生き返る— (筆者要約)

郷土文学館では、今年度から第一土曜日の午後「ラウンジのひととき」を開催しています。方言詩とギター、弾き語り、ドラマリーディングなど、郷土文学と「音」のコラボレーションです。

6 月はマンドリンとギターの演奏会。大正期の弘前に初めてマンドリンを持ち込んだという石坂洋次郎のマンドリンの楽譜 (大正 11 年) を特別展示しました。マンドリンとギターの演奏が始まるや、今まで資料庫で静かに眠っていた古い楽譜が命を吹き込まれたかのように生き生きと輝いて見えました。まるで、ポンペイの円形劇場の廃墟で歌姫が一瞬「死の都」を生き返らせたように…。 「魂」のこもった「音色」が文学館に響き渡り、新たな可能性が広がる「ひととき」でもありました。

企画研究専門官 櫛引洋一

〈来館者の声〉

ラウンジでのコンサートすばらしかったです。加藤謙一展、作家が描いた観桜会、展示内容がわかりやすく良かったです。(市内・男性)

明・暗の人間性をうまく捉えた、ユーモラスな、贅沢な文芸の里であることを知りました。桜と岩木山はいつ見ても良いですね。(千葉県・男性)

歴史を学び、昭和の様子を見ることができて面白かったです。(市内・女性)

とても心に響くものがあった。謙一や手塚の直筆の手紙にも感動した。編集者としての原点に気づかされた。(県外・女性)

私も子どもたちを明るく健やかに育てる仕事に身を捧げたいです。素晴らしかった!(市内・男性)

落ち着いた良い文学館。静かなのがいい。2 度目です。(大阪府・男性)

北の文脈ニュース 第 79 号

Kitano bunmvaku news

第 42 回企画展「名編集長・加藤謙一 — 『少年倶楽部』 から『漫画少年』へ —」

加藤謙一の人生を変えた出会い

講師：加藤丈夫 氏 (国立公文書館館長・加藤謙一四男)

第 42 回企画展「名編集長・加藤謙一」の記念講演会が 8 月 18 日、弘前市立弘前図書館 2 階視聴覚室で開催されました。

講師の加藤丈夫氏は、1938 年、加藤謙一の四男として東京に生まれました。東京大学法学部卒業後に富士電機株式会社に入社。同社取締役会長を経て、2000 年から 2008 年まで学校法人開成学園理事長、2013 年からは国立公文書の館長を務められています。著書に『『漫画少年』物語—編集者・加藤謙一伝』(2002 年・都市出版)があります。



加藤氏は「謙一の人生の大事な時にはいつも素晴らしい方との出会いがあった」として、7 つの出会いを挙げています。最初の出会い、富田尋常小学校の 3 年生は、謙一が学級誌『なかよし』を作るきっかけになった子どもたちであり、この教員時代の経験が後の色々な仕事における本当の原点になったと加藤氏は指摘します。22 歳で上京した後は、講談社初代社長の野間清治に熱意を見出されて『少年倶楽部』の編集長に抜擢、さらに同郷の先輩作家である佐藤紅緑との衝撃的な出会いを経て「あゝ玉杯に花うけて」の連載を実現させました。その後、『少年倶楽部』に漫画を載せる試みをしていた時に登場するのが田河水泡です。水泡自身の苦労や哀愁を込めて描いた「のらくろ」は大ヒットし、10 年続く大連載となりました。加藤氏は「自分自身の気持ちや魂を込めて描いた漫画は子どもたちに訴えるものがある」として、子どもたちと真摯に向き合う謙一の姿勢を改めて強調しました。

戦後、公職追放により謙一は講談社を退職し、新たに設立した学童社で『漫画少年』の創刊を始めます。家庭では 7 人の子どもを抱え、加藤氏曰く「吹けば飛ぶような出版社」でしたが、昭和 25 年、そこを偶然訪れたのが「ジャングル大帝」の粗原稿を手にした手塚治虫でした。謙一は当時まだ無名だった手塚の才能を見出し、手塚は加藤家と家族ぐるみの付き合いをしていきます。謙一との出会いを「人生の師に出会ったようなものだった」と振り返る手塚は、日本の漫画界を代表する大スターへと成長しました。

「謙一の人生を変えた出会い」として最後に挙げられたのは、親友の宇野親美と、妻の昌でした。小学校 2 年生で宇野が転校してきた時から 2 人は片時も離れない親友となり、その友情はまるで「あゝ玉杯に花うけて」のチビ公と柳光一のようなだと加藤氏は言います。さらに、宇野との出会いがなければ謙一は東京に出ることも、講談社に行くこともできなかっただろうと言い、謙一の人生の最大の功労者は宇野親美なのではないだろうか、



と 2 人の絆の強さを語りました。妻の昌は宇野の実妹で、育児や家庭のことを全て引き受けて謙一の仕事を支えました。昌のような人物がいたからこそ、謙一はやりたい仕事に打ち込み、数々の業績を残すことができたのだと言います。

講演会は補助席や立ち見が出るほどの好評ぶりで、聴講された方々は、数々の運命的な出会いや加藤家四男ならではのエピソードに聞き入っていました。足を運んでくださったみなさま、ありがとうございました。

スポット企画展

作家が描いた観桜会 4月1日から6月29日まで

昭和39年5月3日、小林秀雄・伊藤整・今日出海らと講演旅行で弘前を訪れた作家・円地文子は、「弘前城の周辺の桜の美しさは、私がこれまでに見たどの花よりも見事な眺めであった」（「お花見」）とその感慨をエッセイに書き記しました。

大正7年5月に「観桜会」が始まって以来、弘前公園の桜祭りは春の到来を告げる風物詩となり、訪れた作家の多くが「日本一の桜」に魅せられて来ました。これら「作家の眼」を通して文章に表現された「観桜会」の魅力を紹介しました。



6月30日から8月31日まで 『少年倶楽部』傑作選

加藤謙一が『少年倶楽部』の編集長を務めたのは大正10年から昭和7年までの11年間でした。その間、同郷の作家・佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」をはじめ、吉川英治「神州天馬俠」、大佛次郎「角兵衛獅子」、山中峯太郎「敵中横断三百里」、南洋一郎「吼える密林」など著名作家の力作が次々と誌面を飾り、『少年倶楽部』は黄金期を迎えます。

全国の愛読者の熱狂的な反響を呼んだ少年小説の〈傑作〉を紹介しました。



『鞍馬天狗』の大佛次郎と加藤謙一 —初公開の書簡を中心に—

開催中

9月1日から11月30日まで

大佛次郎（1897～1973・横浜市）の〈鞍馬天狗〉は、首都・東京が焦土と化した関東大震災の翌年（大正13年）に初めて登場し、以後42年の長きにわたって47作品が書き継がれ、国民的なヒーローとなりました。

『少年倶楽部』の最初の連載は、「少年の為に『鞍馬天狗』」の副題がついた「角兵衛獅子」（昭和2年3月～3年5月）で、鞍馬天狗を慕う角兵衛獅子の杉作少年が登場し、「山嶽党奇談」「青銅鬼」とシリーズは続きます。

大佛次郎は、『少年倶楽部』に連載した作品の数では佐藤紅緑（1874～1949・弘前市）と双璧をなし、『少年倶楽部』編集長の加藤謙一（1896～1975・弘前市）は敬意を込めて、大佛の人柄を「志操純粹の自由人」と表現しました。

本展では、「角兵衛獅子」の連載が始まる昭和2年から45年まで、加藤謙一が大佛次郎に宛てた6通の書簡を中心に展示し、「角兵衛獅子」にまつわる2人の交流や加藤が編集した『少年倶楽部』『漫画少年』の当時の状況などを紹介します。書簡はいずれも横浜市の大佛次郎記念館所蔵で、6通のうち4通は初公開です。



無料上映会のお知らせ

スポット展の開催に合わせて嵐寛寿郎、美空ひばり主演「鞍馬天狗 角兵衛獅子」を上映いたします。

日時：10月14日10時（9時30分開場）
場所：弘前図書館2階視聴覚室
定員：60名（先着順）
お申込み：文学館受付またはお電話（0172-37-5505）まで

北の文脈文学講座 & ラウンジのひととき

毎年好評の「北の文脈文学講座」に加え、今年度から「ラウンジのひととき」と題し、どなたにでも気軽に参加できる催しを始めました。毎回立ち見が出るほどの盛況ぶりです。

12月まで開催しておりますので、まだの方はぜひお立ち寄りください。



5月19日開催の北の文脈文学講座
講師：仁平政人氏



6月2日開催の
マンドリン&ギターコンサート
出演：古川里美さん、今井正治さん



9月1日開催のドラマリーディング
出演：津軽カタリストのみなさん

文学散歩

「方言詩ロードを歩く」

《講師 櫛引洋一》

7月14日(土)は好天に恵まれ、参観者15名で「文学散歩」がスタートしました。今回のテーマは「方言詩」。弘前公園とその周辺の文学碑めぐり、作者の作品に対する思い・背景を講師の解説を聴きながら「方言詩」の良さを再発見しました。

- 〈コース〉館内での解説
- 一戸謙三 文学碑（藤田記念庭園）
- 福士幸次郎 文学碑（弘前公園三の丸）
- 太宰治生誕の地 金木産の玉鹿石
- 宇津野研 歌碑（護国神社）
- 高木恭造 文学碑（まるめろ緑地）



一戸謙三 文学碑
碑文：「弘前」の一節



福士幸次郎 文学碑
碑文：「鶺鴒（くぐい）」の一節



高木恭造 文学碑
碑文：「冬の月」の一節



太宰治生誕の地
金木産の玉鹿石

真夏日の中、途中、弘前城情報館と護国神社のご厚意により社務所で休憩を取り、最後まで歩くことが出来ました。参加者の方に方言詩の朗読をしてもらい（とても上手でした）、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

次回は平成30年10月27日（土）「加藤謙一文学散歩」を開催します。皆様のご参加をお待ちしております。



宇津野研 歌碑